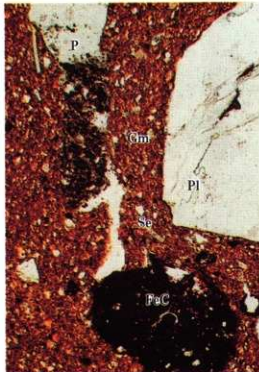




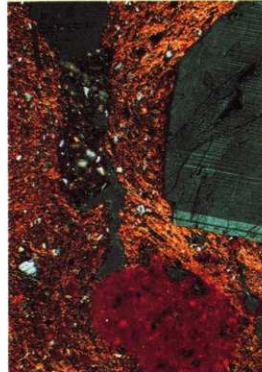
9. 試料No.5
(隠川(2)外遺跡 ER17 4号溝 埋土2層 裏体部)



10. 試料No.5
(隠川(2)外遺跡 ER17 4号溝 埋土2層 裏体部)



11. 試料No.6
(隠川(2)外遺跡 FA18 8号溝 底面直上 壺? 体部)

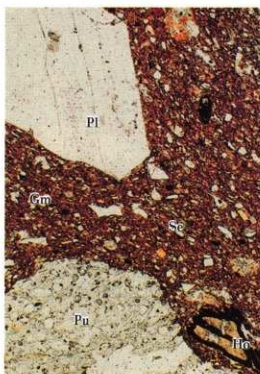


12. 試料No.6
(隠川(2)外遺跡 FA18 8号溝 底面直上 壺? 体部)

QZ:石英 Pl:斜長石 Se:セリサイト FeC:酸化鉄結核 Gm:基質 P:孔隙
写真左側は下方ボーラーのみ、右側は直交ボーラー下

図版3 胎土薄片(3)

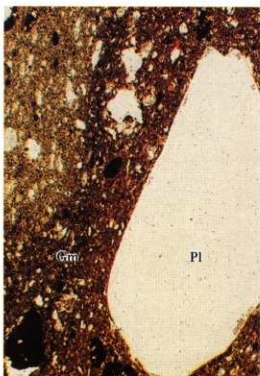
0.2mm



13. 試料No. 7
(持子沢B遺跡 壺 体部)



14. 試料No. 7
(持子沢B遺跡 壺 体部)



15. 試料No. 8
(持子沢B遺跡 壺? 体部)

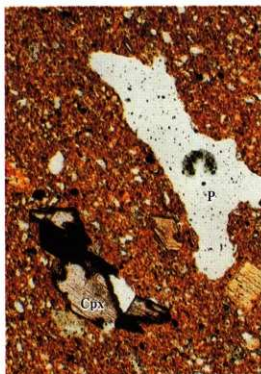


16. 試料No. 8
(持子沢B遺跡 壺? 体部)

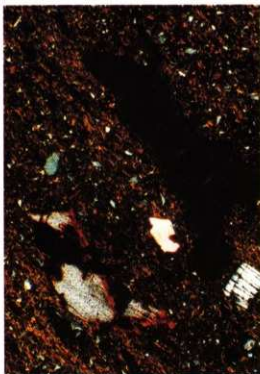
Pl:斜長石 Pu:軽石 Se:セリサイト Gm:基質
写真左側は下方ポーラーのみ、右側は直交ポーラー下

図版 4 胎土薄片 (4)

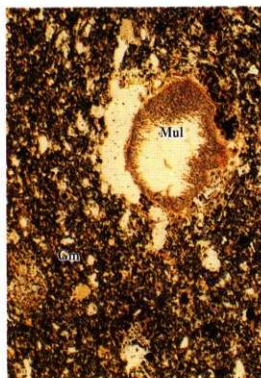
0.2mm



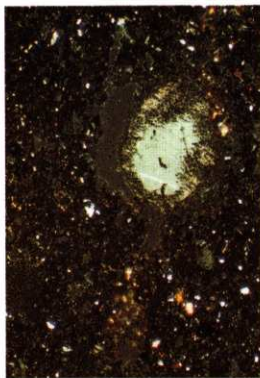
17. 試料No. 9
(砂田D遺跡 2号窯 壺 体部)



18. 試料No. 9
(砂田D遺跡 2号窯 壺 体部)



19. 試料No.10
(砂田D遺跡 2号窯 壺? 底部)



20. 試料No.10
(砂田D遺跡 2号窯 壺? 底部)

Cpx: 単斜輝石 Mul: ムライト Gm: 基質 P: 孔隙
写真左側は下方ポーラーのみ、右側は直交ポーラー下

図版 5 胎土薄片 (5)

0.2mm

第3節 隠川(2)外遺跡出土の火山灰分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

隠川(2)外遺跡では、これまでの発掘調査により、住居跡や溝、土壌などの遺構や上師器・須恵器などの遺物が検出されている。発掘調査所見では、これらの遺構や遺物の時期はおよそ8世紀から9世紀頃が中心と考えられている。

今回の発掘調査では、住居跡・土壌および溝の各遺構の断面観察において、覆土中に火山灰(テフラ)からなる堆積物が確認された。今回の分析調査では、これらのテフラ堆積物のテフラを同定し、既知のテフラ層序と対比することにより遺構の年代資料とし、遺構の年代について情報を得る。

1. 試料

試料が採取された遺構は、7号住居内SK02、12号住居、SD10、SDX03である。

7号住居内床面には、SK01とSK02が重複して認められ、SK02はSK01に切られている。SK02の覆土は4層～6層に分層されている。覆土最下層の6層はにぶい黄褐色粘土である地山層、その上位の5層は炭化物や焼土粒・火山灰ブロックを含む暗褐色土層、最上位の4層はにぶい黄褐色粘土層である。このうち、5層より採取された火山灰サンプルNo.1を対象に、テフラ分析を行う。

12号住居では、覆土が1～12層に分層されている。断面中央の最下底に認められる6層内には少量の火山灰が確認されるため、6層より採取された火山灰サンプルNo.2についてテフラ分析を行う。

SD10のB-B'断面では、溝の覆土は1層～4層と6層の合計5枚に分層されている。覆土の上部あたる2層は、火山灰の薄層として観察される。この2層より採取した火山灰サンプルNo.3について、テフラ分析を行う。

SDX03のA-A'断面では、溝の覆土は1～6層に分層されている。SD10と同様に、覆土の上部にあたる2層は、火山灰の薄層とみられるため、これより採取した火山灰サンプルNo.4について、テフラ分析を行う。

2. 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この作業を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象として観察し、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型・軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつき目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。火山ガラスの形態分類による同定が困難である場合、火山ガラスの屈折率を測定する。測定には、温度変化型屈折率測定装置

“MAIOT” (古澤, 1995)を用いて、30片以上の火山ガラスを計測する。

表11 テフラ分析結果

試料名	遺構名	層名	スコリア 量	火山ガラス		軽石		由来するテフラ	
				量	色調・形態	量	色調・発泡度最大粒径		
火山灰サンプルNo. 1	7号住居内SK02	5層	—	++++	cl・pm>cl・bw>br・pm, br・bw	+++	W・sb~b	8	To-a>B-Tm
火山灰サンプルNo. 2	12号住居	6層	—	++++	cl・pm>cl・bw>br・pm, br・bw	+	W・sb~b	2.3	B-Tm>To-a
火山灰サンプルNo. 3	SD10	2層	—	++++	cl・pm>cl・bw>br・pm, br・bw	(+)	W・sb~b	0.5	B-Tm>To-a
火山灰サンプルNo. 4	SDX03	2層	—	++++	cl・pm>cl・bw>br・pm, br・bw	—			B-Tm>To-a

凡例 —:含まれない, (+):極めて微量, +:微量, ++:少量, +++:中量, ++++:多量。

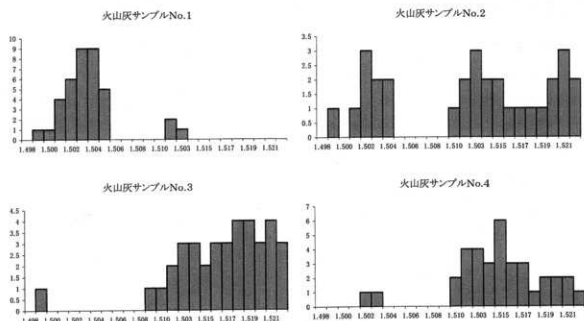
W:白色, g:良好, sb:やや不良, b:不良, 最大粒径はmm。

cl:無色透明, br:褐色, bw:バブル型, pm:軽石型。

3. 結果

テフラ分析結果を、表11に示す。スコリアはどの試料にも認められず、火山ガラスは分析した4試料すべてに認められ、軽石は火山灰サンプルNo.1～3に認められる。

火山ガラスは、どの試料にも、同様の特徴を有する物が多量に認められる。無色透明の軽石型火山ガラスが最も多く、次いで無色透明のバブル型が多く含まれており、ほかに微量の褐色を呈する軽石型およびバブル型も認められる。試料中に認められる火山ガラスは、その特徴と遺跡の地理的位置、試料が採取された層位を考慮すると、十和田aテフラ(To-a:町田ほか, 1981)あるいは、これとほぼ同時期に降灰した白頭山苦小牧テフラ(B-Tm:町田ほか, 1981)のいずれかであると考えられる。これらのテフラは火山ガラスの形態がよく似ており、顕微鏡観察のみでの識別は困難であるため、火山ガラスの屈折率を測定した。測定結果を第143図に示す。火山灰サンプルNo.1では、1.499-1.505の範囲に集中し、火山灰サンプルNo.2では1.498-1.505と1.510-1.522の二つの領域を持っている。火山



第143図 火山ガラスの屈折率
(各グラフの横軸は屈折率、縦軸は測定個数を表す)

灰サンプルNo 3・4では1.509-1.522に集中している。各テフラの屈折率は、To-aは1.496-1.504、B-Tmは1.511-1.522とされている(町田・新井, 1992)。したがって、火山灰サンプルNo 1にはTo-aが多く、B-Tmは微量、火山灰サンプルNo 2には、B-Tmが多く、To-aは少量、火山灰サンプルNo 3・4にはB-Tmが多く、To-aが微量含まれていることがわかる。

町田・新井(1992)によると、To-aはA.D.915年に十和田カルデラより噴出したとされ、供給源から南方の東北地方一帯に広く分布している。B-Tmは朝鮮半島北部に位置する白頭山より噴出したとされ、日本では東北地方北部から北海道にかけて分布している。To-aとB-Tmの噴出年代には、長くとも数十年程度の間隙しかないと考えられている(町田ほか, 1981)。最近では、早川・小山(1998)が、史料の記録とその火山学的検討から、To-aを噴出した噴火活動のクライマックスは、915年8月17日、白頭山の噴火クライマックスは、945年2月7日であるとした。これに従えば、両テフラの間隔は30年程度ということになる。

軽石は、火山灰サンプルNo 1に中量、火山灰サンプルNo 2に微量、火山灰サンプルNo 3に極めて微量含まれている。軽石はすべて白色を呈し、発泡がやや不良である。火山灰サンプルNo 1に含まれる軽石は粒径が揃って、最大径は8mmである。この軽石は、その特徴と遺跡の地理的位置より、To-aに由来すると考えられる。

4. 考察

(1) 遺構の年代について

火山灰サンプルNo 1の採取された7号住居内のSK02の覆土5層は、ロームブロックや炭化物および焼土ブロックそして火山灰ブロックなどが認められることから、人為的な埋土である可能性がある。その埋土中にTo-aの火山ガラスと軽石からなるブロックが確認されたのであるから、SK02はTo-aの噴出より後に埋積したことになる。さらに、微量とはいえ、B-Tmに由来する火山ガラスも含まれていることから、その埋積はB-Tm降下後である可能性もある。ただし、5層や4層の上位に堆積する自然堆積土中にB-Tmの火山ガラスが含まれていた場合には、植物根や小動物などの攪乱作用により、B-Tmの火山ガラスが5層中に混入することも考えられる。この場合は、SK02はB-Tmより以前に埋積した可能性も生じる。今後、遺構周辺における自然堆積土層のB-Tmの産状を検討したい。なお、SK02が住居内に構築されたものであるとすると、その構築年代については、現時点ではTo-a以後とも以前とも判断することはできない。すなわち、降灰以前に土壌が構築されていても、降灰時に住居内の土壌にはテフラが堆積することはないからである。

火山灰サンプル2が採取された12号住居覆土の6層には、To-aとB-Tmが混在して認められる。試料中には、軽石と火山ガラス以外の砂分は少量しか含まれないこと、火山ガラスの混在比はB-Tmの方が多く、B-TmがTo-aより後に降灰しているテフラであることから、住居の埋積に関して次のように考えられる。住居が廃棄された後に、To-aを含む住居跡周囲の堆積物により住居の埋積が進行したが、埋積の初期の過程である6層堆積時にB-Tmが降灰したと考えられる。つまり、住居の廃棄はB-Tm降灰以前と考えられる。また、上述のSK02と同様の理由により、住居の構築年代とTo-aの降灰年代との関係は不明である。

火山灰サンプルNo.3の採取されたSD10の覆土2層と、火山灰サンプルNo.4の採取されたSDX03の覆土2層からは、B-Tmに由来する火山ガラスが多く認められた。どちらも断面上においてテフラ層として認められることから、溝の覆土上に降灰したB-Tmがそのまま保存されたと考えられる。したがって、SD10およびSDX03の構築は、B-Tm降灰以前であり、B-Tm降灰時には、溝の埋積もかなり進行していたことがわかる。また、現地所見では、両遺構ともにB-Tm下位の覆土にはテフラ層が認められていないことから、To-a以後に構築された可能性が高い。To-a以前に構築されていたならば、To-a降灰時にはB-Tm以上にTo-aの碎屑物が堆積し、たとえ水が流れていたとしてもブロック状堆積物など何らかの痕跡は残ると考えられるからである。ここで、前述したTo-aとB-Tmの降灰年代を引用すれば、SD10とSDX03の構築年代は、915年以降947年までの間ということになる。

【引用文献】

- 早川幸雄・小山真人（1998）日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日—和田湖と白頭山—、火山, 43, p403-407
- 古澤 明（1995）火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別、地学雑誌, 101, pp. 123-133.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス, 276p., 東京大学出版会
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）日本海を渡ってきたテフラ, 科学, 51, pp. 562-569.
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦（1984）テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログ—、渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, pp. 865-928



1. To-aの軽石と火山ガラス
(試料番号1 7号住居内 SK-02 5層)



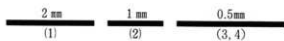
2. To-aの軽石・火山ガラスとB-Tmの火山ガラス
(試料番号2 12号住居 6層)



3. B-Tmの火山ガラス
(試料番号3 SD-10 2層)



4. B-Tmの火山ガラス
(試料番号4 SDX-03 2層)



図版6 軽石・火山ガラス

第4節 隠川(2)外遺跡平安時代住居跡から検出された炭化材の年代及び樹種同定について

バリノ・サーヴェイ株式会社

年代測定について

1. 試料

試料は、平安時代(9世紀末~10世紀初頭)の住居跡から出土した、2点(試料番号1~2)の炭化材である。そのうち試料番号1は貼り床から出土しており、試料番号2はカマドから出土している。

2. 方法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。放射性炭素の半減期として、RIBBYの半減期5,570年を使用した。また、各試料とも、同位体効果の補正を行った。

3. 結果

表12 放射性炭素年代測定結果

試料番号	時代	遺構	位置	試料の質	年代	Code No.
1	平安	住居跡	貼り床	炭化材	1170±50	GaK-20180
2	平安	住居跡	カマド	炭化材	2350±200	GaK-20181

年代測定結果を表12に示す。

2点の試料の年代測定の結果、
2350±200~1170±50y.B.P.

の年代値が得られた。

- 1)年代値は、1950年を基点とした年数
2)年代値は、同位体効果の補正を行った値
3)放射性炭素の半減期は、RIBBYの5570年を使用した

4. 考察

年代測定を行った炭化材は、いずれも平安時代の住居跡から得られている。試料番号1の年代値は、奈良・平安時代にほぼ相当するが、出土遺物から想定されている年代値とは必ずしも一致しない。一方、試料番号2の年代値は縄文時代晩期から弥生時代頃に相当するものであり(キーリ・武蔵, 1982)、出土遺物から想定されている年代値とは全く一致しない。また両試料間では約1000年以上の開きがあった。

その原因については、試料番号1の場合、貼り床構築時に古い炭化材が混入したことや、木材の樹齢の問題が想定される。一方、試料番号2については、周辺土壌に含まれていた古い有機物の影響を受けたことや、燃料材への古材の利用も可能性としてあげられる。

樹種同定について

1. 試料

試料は、住居跡から出土した炭化材4点(試料番号1~4)である。各試料の詳細は、樹種同定結果とともに表13に記した。

表13 樹種同定結果

番号	遺構	位置	層位	樹種
1	8号住居跡	カマド	5層	ブナ属
2	10号住居跡		4層	モクレン属
3	11号住居跡	床面?	6層	クリ
4	13号住居跡	カマド	4層	ヒノキ科

2. 方法

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の判断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 炭化材の樹種同定結果

樹種同定結果を、表13に示す。炭化材は、針葉樹1種類(ヒノキ科)と広葉樹3種類(ブナ属・クリ・モクレン属)に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

●ヒノキ科 (Cupressaceae)

仮道管の早材部から晩材部への移行は穏やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はスギ型～ヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

●ブナ属 (Fagus) ブナ科

散孔材で、管孔は単列または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

●クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

試料は保存状態が悪く、全て年輪界で割れてしまった。環孔材で、孔圍部は1～3列、孔圍外で急激に管径を減じたのち、火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～5細胞高。

●モクレン属 (Magnolia) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～2細胞幅、1～40細胞高。

4. 考察

炭化材は、各住居跡の床面やカマドから出土している。床面から出土した試料は住居構築材、カマドから出土した試料は燃料材の可能性がある。

これらの炭化材には、針葉樹1種類と落葉広葉樹3種類が認められた。カマドから出土した炭化材は、8号住居跡がブナ属、13号住居跡がヒノキ科であった。このことから、本遺跡では、針葉樹材と広葉樹材が共に燃料として利用されていたことが推定される。広葉樹のブナ属と、針葉樹のヒノキ科では、燃料材としての性質が多少異なる。そのため、住居による種類の違いは、利用目的等による木材の違いを示している可能性がある。しかし、点数が少ないため、詳細は不明である。

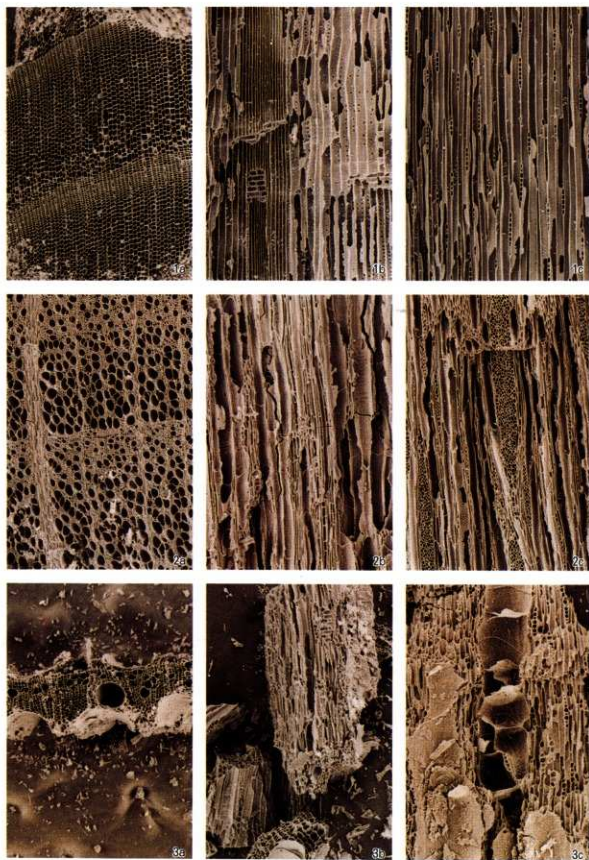
一方、11号住居跡の床面から出土した炭化材は、クリであった。青森県内の他地域で行われた古代の住居構築材の樹種同定結果(嶋倉, 1980 a, 1980 b, 1982 a, 1982 b, 1983, 1987 a, 1987 b, 1988; パリノ・サーヴェイ株式会社, 1998)を見ると、太平洋側でコナラ節が目立つが、全体的にはクリが多く見られ、今回の結果とも調和的である。クリが多く利用された背景には、強度や耐朽性に優れた材質を有して

いることが挙げられる。本遺跡でも、このようなクリの材質を考慮した用材が行われていたことが推定される。

10号住居跡から出土した炭化材は、モクレン属であった。炭化材の用途などに関する詳細は不明であるが、モクレン属は住居構築材などとして利用された例が知られている(嶋倉, 1980b)。このことから、本遺跡でも住居構築材などとして利用されていたことが推定される。

【引用文献】

- パリー・サーヴェイ株式会社 (1998) 外馬屋前田 (I) 遺跡出土の植物遺体の同定。
 青森県埋蔵文化報告書第242集「外馬屋前田 (I) 遺跡—県営津軽中部地区広域農道整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書—」,
 p. 128—133, 青森県教育委員会
- キーリーC.T.・武藤康弘 (1992) 縄文時代の年代。
 加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「縄文文化の研究1 縄文人とその環境」, pp. 246—275, 雄山閣
- 東村武信 (1990) 改訂 考古学と物理化学, 212p. 学生社
- 嶋倉巳三郎 (1980a) 永野遺跡出土の炭化材, 青森県埋蔵文化財調査報告書第56集
 「永野遺跡発掘調査報告書 昭和54年度」, p. 370—371, 青森県教育委員会
- 嶋倉巳三郎 (1980b) 板留 (2) 遺跡から出土した炭化材の樹種, 青森県埋蔵文化財調査報告書第59集
 「板留 (2) 遺跡 発掘調査報告書」, p. 1—2, 青森県教育委員会
- 嶋倉巳三郎 (1982a) 青森県の遺跡から出土した炭化材の樹種, 青森県埋蔵文化財調査報告書第70集
 「馬場瀬遺跡 発掘調査報告書」, p. 284—285, 青森県教育委員会
- 嶋倉巳三郎 (1982b) 樹種同定, 青森県埋蔵文化財調査報告書第67集
 「兜茶沢遺跡 むつ小川開発に係る幹線連絡道路建設およびバイパス敷設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」,
 p. 383, 青森県教育委員会
- 嶋倉巳三郎 (1983) 松原遺跡の炭化木, 青森県埋蔵文化財調査報告書第77集
 「松原遺跡・陣馬川原遺跡・榎ノ木遺跡 県営宇久保・馬門地区—一般農道整備予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書—」,
 p. 53, 青森県教育委員会
- 嶋倉巳三郎 (1997a) 山本遺跡出土の炭化木, 青森県埋蔵文化財調査報告書第105集
 「山本遺跡—一般国道7号線没岡バイパス建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」,
 p. 203—204, 青森県教育委員会
- 嶋倉巳三郎 (1987b) 弥栄平 (4) (5) 遺跡出土の炭化材樹種同定, 青森県埋蔵文化財調査報告書第106集
 「弥栄平 (4) (5) 遺跡発掘調査報告書—むつ小川開発事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書」,
 p. 205—206, 青森県教育委員会
- 嶋倉巳三郎 (1988) 茶屋館遺跡出土の炭化物, 青森県埋蔵文化財調査報告書第110集「茶屋館遺跡」,
 p. 239—240, 青森県教育委員会



1. ヒノキ材(試料番号4) 2. プナ属(試料番号1) 3. クリ(試料番号3)
 a: 木口 b: 柱目 c: 板目

図版7 炭化材(1)

200 μm: a
 200 μm: b, c



4. モクレン属(試料番号2)
a: 木口 b: 椀目 c: 板目

— 200 μ m : a
— 200 μ m : b, c

第8章 調査のまとめ

隠川(2)外遺跡は、五所川原市持子沢字隠川に所在する遺跡で、梵珠山からのびる火山性の台地上、標高40～60mに位置している。

本調査では標高51～61m、調査面積14,800平方メートルの範囲から、平安時代の竪穴住居跡15棟、土壌35基、溝状遺構18条が検出され、遺物では平安時代の土師器、須恵器を中心として、土製品、旧石器、縄文土器・石器が出土した。

住居跡では、屋内にロクロピット及び土器制作時に使用した原材料の粘土を有する住居跡が検出され、隠川(4)・(2)遺跡同様、丁房跡の可能性が高いと考えられる。また各住居跡は非常に規格化されたもので、同一規模の住居跡は殆ど同じ規模であり、基軸方位もカマドの検出された住居跡はすべて東南方向に向いている。

土壌では用途不明であるが焼成土壌が4基検出され、規模は異なるものの、形態は隅丸の長方形を呈している。いずれの土壌も白頭山苦小牧火山灰が覆土中に薄層として認められるため、9世紀の末～10世紀の初頭に位置づけられる。

溝状遺構では形態が異なる3種の溝跡が確認され、方形状に巡る溝跡は、あまり類例がなく、今後の資料増加により、どのような機能を有していたのか今後の課題としていきたい。18つの溝跡の内、13の溝跡から上層付近に白頭山苦小牧火山灰が覆土中に薄層として認められるため、9世紀後半～10世紀前半に位置づけられる。

遺物では五所川原市では初めて(鞠ノ沢遺跡での報告があるが実物所在不明)、旧石器が出土し、しかもそれが、荒屋型彫刻刀であることから、後期旧石器時代～晩期旧石器時代の五所川原市の歴史を考える上で貴重な資料といえる。

平安時代の土師器壺類はロクロ使用のものが約8割を占め、時期としては9世紀後半～10世紀初頭に位置づけられる。また坏類では、須恵器・土師器の別なく製作技法・器形は同様であるが、土師器坏に関しては口径150mm以上の大形の個体が製作されている。須恵器坏ではおよそ120～140mmの範囲に収斂され、法量の同一化が図られている。

各須恵器には100%近い割合でへら書記号が外面の目立つ部位に描かれている。また土師器の坏にも須恵器坏と同様な場所にへら書記号が描かれているものが多く、当遺跡の特徴となっている。

以上のように隠川(2)外遺跡は須恵器の製作開始期であると考えられている持子沢窯跡群から至近距離に位置し、工人の集落跡と考えられている隠川(4)・(2)遺跡と同様の性格を有する遺跡である点から、当遺跡もまた工人の集落跡である可能性が高いと考えられる。

最後に、当市で進めている須恵器の窯跡の発掘調査整備事業により、須恵器窯跡の資料数の増加を図り、各窯跡の編年作業を行い、当該地域の須恵器製作時期を確定することにある。そのために当遺跡の資料は窯跡の製作開始時期にあたる遺跡で、今回の報告書では事実記載のみに終始したが、今後土師器の編年を詰めていくことで、製作開始時期を確定していくことが今後の課題である。

【引用・参考文献】

- 相澤治、赤羽貞由美 1997 「実吉遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第207集』
- 新谷武ほか 1976 「石上神社遺跡発掘調査報告書IV」『青森県埋蔵文化財調査報告書第035集』
- 新谷雄蔵 1994 「石田遺跡」『五所川原市埋蔵文化財調査報告書第16集』
- 上野秀一、仙庭伸久 1993 「K435遺跡」『札幌市埋蔵文化財調査報告書XLII』
- 遠藤正夫、岡田康博 1987 「小田内沼(1)遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第107集』
- 大湯卓二ほか 1994 「家ノ前遺跡Ⅱ、鷹架遺跡Ⅱ」『青森県埋蔵文化財調査報告書第160集』
- 小田川哲彦ほか 1999 「櫛引遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第263集』
- 小山彦逸 1996 「原子城跡」『五所川原市埋蔵文化財調査報告書第17集』
- 葛西勲 1999 「大光寺新城跡遺跡(第4・5次調査)」『平賀町埋蔵文化財報告書第24集』
- 川口潤、木村高 1994 「松山遺跡・羽黒平(1)遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第170集』
- 川口潤ほか 1996 「羽黒平(1)遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第194集』
- 北林八洲晴ほか 1999 「新町野・野木遺跡」『青森市埋蔵文化財調査報告書第46集』
- 木村淳一ほか 1998 「野木遺跡」『青森市埋蔵文化財調査報告書第38集』
- 木村淳彦、設楽政健 1997 「新町野遺跡試掘調査報告書」『青森市埋蔵文化財調査報告書第33集』
- 木村高、坂本貞弓 1997 「隈無(4)遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第209集』
- 木村高、二林健一 1998 「隠川(4)遺跡・隠川(2)Ⅰ遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第244集』
- 木村高、中村博文 1999 「隠川(1)Ⅰ・隠川(2)Ⅱ遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第260集』
- 工藤 清泰ほか 1999 「犬走須器器窯跡発掘調査報告書」『五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集』
- 工藤大 1997 「隈無(1)(2)(6)遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第237集』
- 工藤大、佐藤智生 1999 「野尻(1)遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第259集』
- (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1993 「川木町 白草遺跡Ⅰ・北篠場遺跡Ⅲ」
『川木工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告』
- 斎藤淳 1994 「中里町の遺跡Ⅱ」『中里町文化財調査報告書第7集』
- 笹森一朗ほか 1998 「畑内遺跡Ⅴ」『青森県埋蔵文化財調査報告書 第262集』
- 白鳥文雄ほか 1993 「朝日山遺跡Ⅱ」『青森県埋蔵文化財調査報告書第152集』
- 白鳥文雄ほか 1995 「朝日山(3)遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第167集』
- 鈴木賢治ほか 1981 「発茶沢遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第067集』
- 鈴木徹 1995 「豊岡(2)遺跡」『黒石市埋蔵文化財調査報告書第13集』
- 須藤隆 1995 『縄文時代晩期貝塚の研究2 中沢貝塚』東北大学文学部考古学研究会
- 芹沢長介、須藤隆ほか 1990 『荒屋遺跡—第2・3次発掘調査概報—』
東北大学文学部考古学研究室、川口町教育委員会
- 相馬信吉 1994 「稲垣村久米川遺跡発掘調査報告書」『青森県埋蔵文化財調査報告書第163集』
- 高橋学・小林克 1989 「一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—福田遺跡・石田遺跡・蟹ヶ沢遺跡・十二林遺跡—」『秋田県埋蔵文化財調査報告書第178集』
- 田澤淳逸、児玉大成 1998 「新町野遺跡」『青森市埋蔵文化財調査報告書第37集』
- 田澤淳逸ほか 1997 「葛野(2)遺跡」『青森市埋蔵文化財調査報告書第34号』
- 田中寿明、栗村知弘 1991 「内姥沢蝦夷館」『東北町埋蔵文化財調査報告書第2集』
- 田中寿明ほか 1992 「白旗館遺跡」『東北町埋蔵文化財調査報告書第1集』
- 中島友文ほか 1998 「新町野・野木遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第239集』

- 中島友文ほか 1999 「野木遺跡Ⅱ」『青森県埋蔵文化財調査報告書第264集』
- 奈良岡淳、神康夫 1995 「朝日山(3)遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第215集』
- 成田正彦 1997 「小栗山館遺跡」(弘前市教育委員会)
- 新聞巖、木村高 1996 「野尻(2)(3)(4)遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第186集』
- 新聞巖、下山信昭 1995 「山元(2)遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第171集』
- 沼宮内陽一郎、姥名純 1999 「葛野(2)遺跡発掘調査報告書Ⅱ」『青森市埋蔵文化財調査報告書第44集』
- 畠山昇、伊藤昭雄 1993 「山元(3)遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第159集』
- 畠山昇、伊藤昭雄 1994 「野尻(2)遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第172集』
- 畠山昇、太田原潤 1998 「高屋敷館遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第243集』
- 畠山昇、長崎勝己 1990 「表館(1)遺跡Ⅳ・免茶沢(1)遺跡Ⅴ」『青森県埋蔵文化財調査報告書第126集』
- 藤井誠二 1997 「K39遺跡 長谷工地点」『札幌市文化財調査報告書55』
- 三浦圭介 1995 「第3章 古代」『新編 弘前市史 資料編1』pp.181-391
- 村越潔 1973 『門筒上器文化』
- 山口義伸、岡田康博 1989 「李沢遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第130集』
- 渡辺泰雄ほか 1996 「沖附(1)遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書第202集』

写真図版



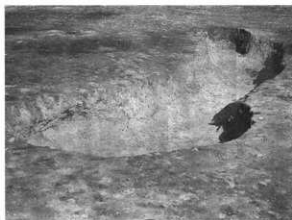
第1号住居跡確認面



第1号住居跡カマド



第1号住居跡完掘状況



第1号住居跡付属外周溝完掘状況



第1号住居跡カマド完掘状況



第2号住居跡セクション



第2号住居跡完掘状況



第3・4号住居跡セクション



第3号住居跡カマド



第3・4号住居跡完掘状況



第5号住居跡カマド



第5号住居跡完掘状況



第6号住居跡セクション



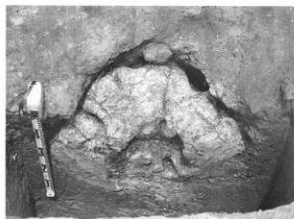
第6号住居跡完掘状況



第7号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡粘土出土状況



第7号住居跡ロクロビットセクション



第7号住居跡ロクロビット完掘状況

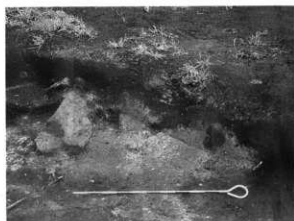
図版 3



第7号住居跡カマド



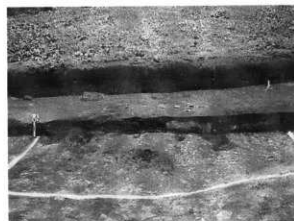
第7号住居跡完掘状況



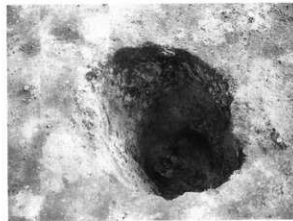
第8号住居跡カマド



第8号住居跡完掘状況



第9号住居跡完掘状況



第9号住居跡柱穴



第10号住居跡集石



第10号住居跡セクション



第10号住居跡完掘状況



第11号住居跡セクション



第11号住居跡遺物出土状況



第11号住居跡完掘状況



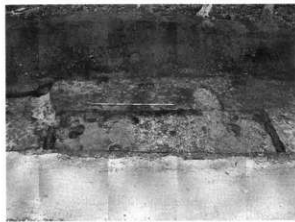
第12号住居跡カマド



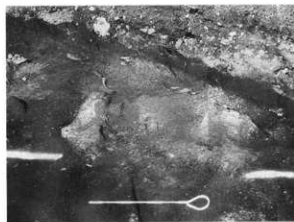
第12号住居跡カマド



第12号住居跡付属外延溝完掘状況



第12号住居跡完掘状況



第13号住居跡カマド



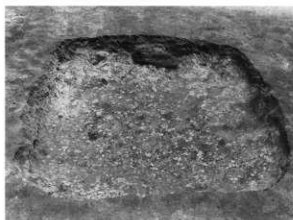
第13号住居跡完掘状況



第14号住居跡完掘状況



第15号住居跡掘り方



第1号土坑完掘状況



第2号土坑完掘状況



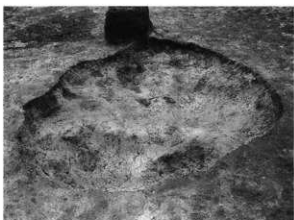
第3号土坑完掘状況



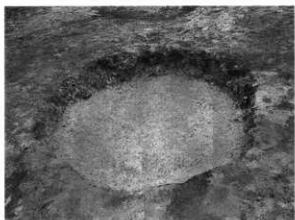
第5号土坑遺物出土状況



第4・5号土坑完掘状况



第6号土坑完掘状况



第7号土坑完掘状况



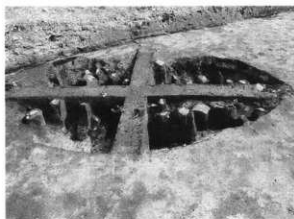
第8~12号土坑完掘状况



第16号土坑完掘状况



第19号土坑完掘状况



第20～22号土坑遺物出土状況



第20～22号土坑完掘状況



第26号土坑完掘状況



第29号土坑完掘状況



第30号土坑完掘状況



第35号土坑完掘状況

第1号溝状遺構炭化物出土状況



第1号溝状遺構完掘状況



第1号溝状遺構完掘状況



第2号溝状遺構、第4・5号土壌完掘状況



第2号溝状遺構完掘状況



第3号溝状遺構完掘状況





第4号溝状遺構広口壺出土状況



第4号溝状遺構セクション



第4号溝状遺構完掘状況



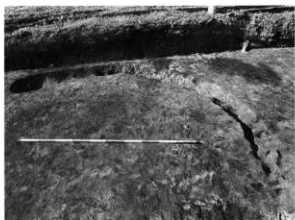
第8号溝状遺構完掘状況



第10号溝状遺構セクション



第9・10号溝状遺構完掘状況



第11号溝状遺構完掘状況



第12・13・14号溝状遺構完掘状況



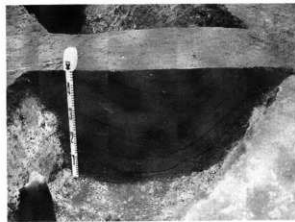
第1号方形溝状遺構セクション



第1号方形溝状遺構完掘状況



第2号方形溝状遺構完掘状況



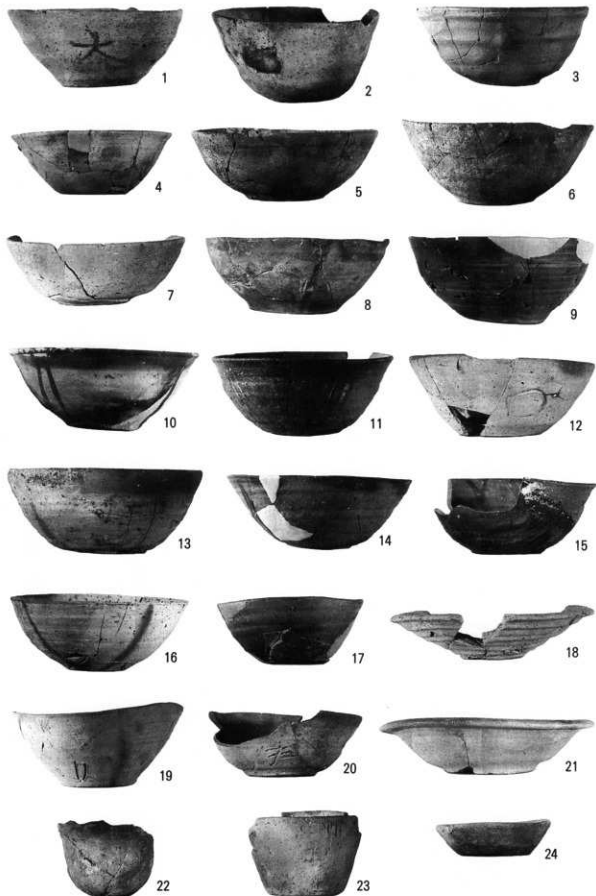
第3号方形溝状遺構セクション



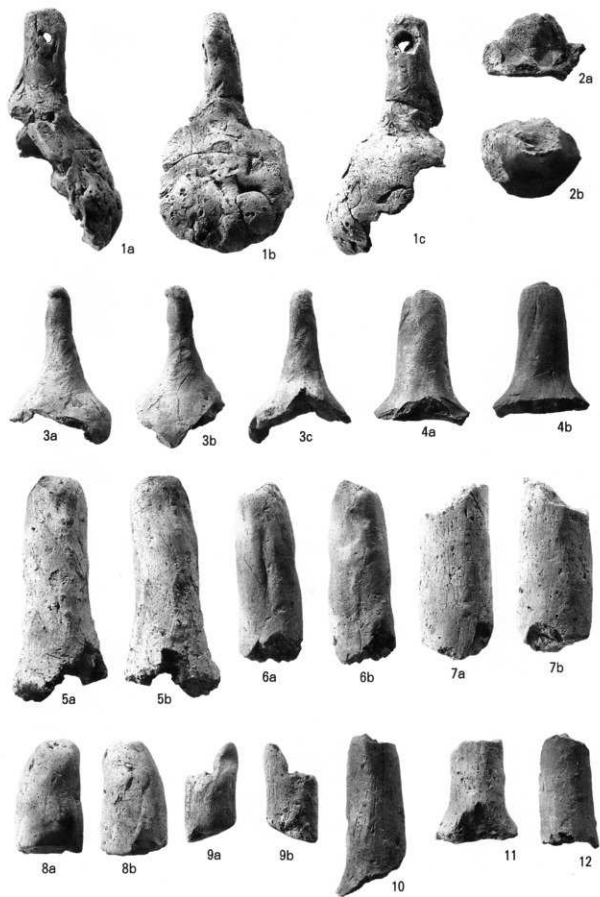
図版13 出土土器(1) 土師器甕類 (S=1/4)



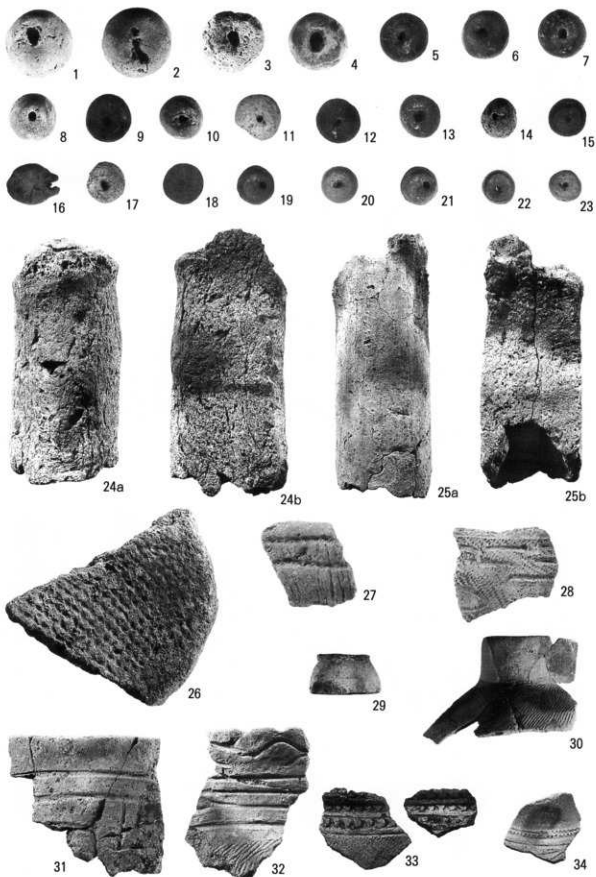
図版14 出土須恵器 1~4: 鉢 5~10・13: 壺 11・12: 甕 (S=1/4, 12のみ1/8)



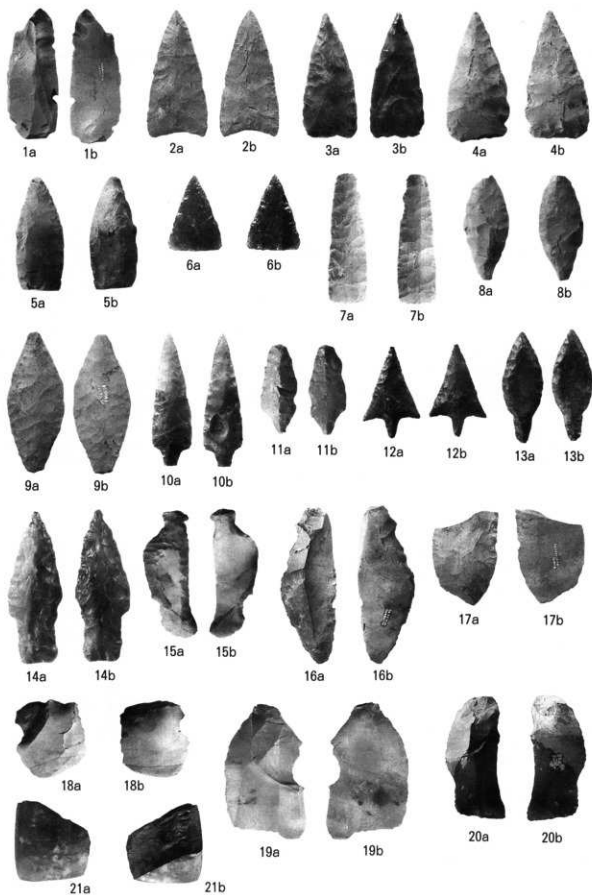
図版15 出土土器 1~7:土師器杯 8~17・19・20:須恵器杯 18・21:土師器皿 22~24:ミニチュア
(1~21:S=1/3, 22~24:S=1/2)



図版16 出土土製品 1~4: 土鈴 5~12: 棒状土製品 (S=4/5)



図版17 出土土製品・土器 1~23:土玉 24・25:羽口 26~34:縄文土器
 (1~23: S=1/1, 24・25: S=1/4, 26~34: S=1/2)



図版18 出土石器 1：旧石器 2~14：石鏃 15~17：石匙 16~18~20：不定形石器 21：磨製石斧
 (1・15~21：S=1/2, 2~14：S=1/1)

報告書抄録

ふりがな	かくれがわ(2)ほかいせき							
書名	隠川(2)外遺跡							
副書名	県営前田野目農免農道整備事業に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編集者名	藤原弘明(執筆者は例言を参照)							
編集機関	五所川原市教育委員会							
所在地	〒037-8686 青森県五所川原市字岩木町12番地 Tel 0173-35-2111							
発行年月日	2000年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
隠川(2)外遺跡	青森県五所川原市大字持子沢字隠川622外	02205	05-062	40度44分57秒	140度32分45秒	14,800㎡	19980511~19981030 19990512~19991028	県営前田野目農免農道整備事業に伴う事前調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項	
隠川(2)外遺跡	不明	旧石器	なし		石器(彫刻刀)		五所川原市では唯一 荒屋型彫刻刀	
	不明	縄文	なし		縄文土器(早期~晩期) 各種石器(石鏃、石匙、 スクレイパー、磨製 石斧等)			
	集落	平安	住居跡 土坑 溝状遺構 方形溝状遺構 並列溝状遺構	15棟 35基 14条 3条 1条	土師器 須恵器 ニチュア 土製品 焼成粘土塊 鉄滓	土器製作工人の工房跡 白頭山-苫小牧火山灰 (B-Tm)降下以前の住居 跡、溝跡が多数検出 土師器、須恵器の素材と 考えられる粘土が住居よ り出土		

五所川原市埋蔵文化財調査報告書 第22集

隠川(2)外遺跡 発掘調査報告書

発行日 2000年3月31日

発行 五所川原市教育委員会

〒037-8686 青森県五所川原市字岩木町12

TEL 0173-35-2111

印刷 / ㈱ 西北印刷